

## 大先輩を訪ねて

3月25日、OR学会の大先輩でもある数学者のお宅を仲間4人で久しぶりに訪問した。聞けば先生はまだお元気で毎朝6kmの散歩をして朝食、お仕事の合間にまた散歩という生活をしておられた。先生は「近所の連中は“あの爺さんは日中むずかしい顔をして出たり入ったり……何をする人かなあ”と思っているだろう」と笑っておられた。

ひととおりのご挨拶が済んで、お互いの無事息災を喜んでビールで乾杯した。一同しばらく会っていなかったのも、お互いの情報交換や時事評論など時の経つのを忘れた。やがてお酒がまわったころ、先生は僕の散歩道を案内しようと提案された。われわれは誘われるままに日光川の堤防沿いに6kmを散歩した。土の香りのする空気を腹一杯吸って、いい気分になった。ある人は“ちょっと走ってみる”と言って往ったり来たりやっていた。途中で藪の塔や土筆を発見し思わぬ収穫を喜んだ。

先生は大学を退官されてからも、現在5年越し研究しておられるお仕事がある由。このコースは考え事をする時に歩く散歩道だそうで、先生にとっては書斎の延長ともいえる環境であろう。

テクテク歩きながらのお話はいつ聞いても楽しい。

先生は「黒板やノートのない草原や木陰で討論することもよいことだ。僕は東山の植物園でセミナーをやったことがあったが、人は言葉で考え、言葉で人に自分の考えている事柄を説明する。われわれの使っている言葉はもともと不完全なものであり、人に正確に自分の考えを伝えるということはむずかしいことだ。……その練習にもなる」といわれた。「いま、中部支部でやっている研究会についても、技術的な発表会……セレモニーだけになってはならない。お互いの知恵を出し合って物事を考える場であってほしい」ともいわれた。

また、こんな思い出話もされた。

「僕は子供のころ、素直ないい子だったと思っているが、小学生の時代に2回だけ先生に食ってかかって困らせたことがある。一つは“七転八起”と先生がいったので、僕は“その人ははじめ寝ていたのですね……でなければそんなことできない……”といて譲らなかった。もう一つは“昔、東郷元帥が100発100中の砲1門は100発1中の砲100門に匹敵するといわれた。”で僕は“100

発100中の砲1門で100発1中の砲を1門ずつやっつけているうちに、100発1中の砲から100発近い丸が飛んでくるので、その100発100中の砲1門はまもなく負けてしまうに違いない”といて反論した。この二つの思い出は当時の先生が、非常に困った顔をされたので、いまでも申し訳ないことをしたと思っている。

また、東郷元帥の砲撃戦の話はいまではランチェスターの第2法則とかなんとかいわれているが、実はナポレオン戦争のころにすでにわかっていたことだ。」

この辺のお話になると、先生の面目躍如としておもしろい。散歩をした日光川は伊勢湾台風で堤防が決壊し、付近に大きな被害をおよぼした。その後も大雨によって、よく被害の出る川である。現在、河床上昇の対策として堤防の嵩上げ工事をやっていた。

そういえば伊勢湾台風のあと、小生も台風に対するOR的なアプローチについて、気象関係の学者や実務家、数学者らと膝を交えて禅問答のような討論を何回もやった記憶がある。

今日の先生のお話は、われわれにORの原点に帰れと戒めているようでもあった。

一同は酒の酔いもすっかりさめ、お腹をすかして先生のお宅にもどった。お宅では奥様心づくしの夕食が待っていた。一同は大喜びでバクついた。

「ところで先生は相変わらずよく召し上がりますか」と問えば、「最近はいかん。家内が健康を心配して食べさせてくれないのだ。お陰で胃袋が小さくなったようだ……。ところで大食いというのが、僕がいちばん食べたころは米を1升2合、飯盒で三つ分になる。餅なら2升は食べた」といわれた。「私も食べ盛りには飯盒1杯を食べたことがあるので、大食いといわれる人は普通の人のほぼ3倍くらい食べるということですか」というと、「しかし、相撲取りとなると僕より食べたなあ。昔、上手投げの名人といわれた大関で清水川という人がいた。その人の全盛時代に連れだって寿司屋にいったことがある。酒を飲みながら握りを食べたが、たしか僕が2桁のうちに彼は3桁になっていたように思う……」など話はずきなかった。14時にうかがったのに外はすでに薄暗くなり、一同すがすがしい気分で別れを惜しみながら辞去した。

(M. M.)